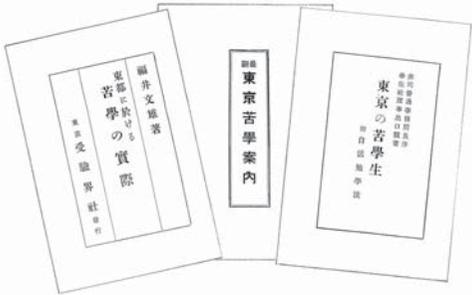


中央大学は戦後の混乱期にアルバイト六大学の筆頭として知られ、中大生の仕事ぶりは堅実な学生らしさがあって評判が良かったという。一方、明治から大正にかけての中大生には働いて学資を稼ぎながら勉強する「苦学生」というイメージがあったようである。

明治三十年代から「苦学」がブームとなり、大正期にかけて『自立自活 東京苦学案内』『新苦学法』『最新苦学案内』など、苦学のための手引書が数多く刊行されている。この背景には、明治二十年代後半から小学校就学率、同三十年頃から高等小学校への進学率がそれぞれ急増する反面で、主に学資の不足を理由に高等小学校卒業者の八割から九割が上級学校に進学しないという状況があった。その中で働いて学資を得て学問する「苦学」や、中学校講義録などの通信教育による「独学」のブームが起って来たといわれる（竹内洋『立志・苦学・出世』（講談社、一九九一年））。

は貸費生制度を追加し、奨学制度の充実をセールのポイントにしている。一九〇八年からは給費生制度も設けられている。

ところで前記の苦学の手引書には、多くの苦学生の实例が紹介されている。出口競『東京の苦学生』（大明堂書店、二一年）が「自活勉学に成功した人々」で、広島出身で二十一歳で上京、逓信省の管理課の雇を勤めながら勉強、専門学校入学者検定試験に首席で及第、中央大



苦学のための手引書

学法科に通学して、専門部三年次に高等文官試験合格、高等官になった佐伯頭を紹介している。また、福井文雄『東都に於ける苦学の実際』（東京受験界社、二二年）が「苦学成功者略伝」で、下野国足利町出身で十八歳で再上京後、書生・新聞配達夫・星亨家の学僕などをしながら中央大学に学

一九二一（大正十）年三月刊の『最新東京苦学案内』（教成社）には「苦学に容易なる大学及専門学校」として、中央大学が日本大学・法政大学専門部・専修大学・東京物理学校とともに紹介され、最もよい苦学の方法および職業として、牛乳配達、新聞配達、新聞売り、印刷製本、職工、諸官省の雇やと・書記（補助職員）が挙げられている。各校の苦学に容易な理由は明らかではないが、本学の場合、学費が低廉であることや奨学制度の充実、学校の近隣に仕事を求めやすいことを含めて地理的条件の良さなどが考えられる。

本学の学費は、〇三（明治三十六）年に専門学校令に準拠して東京法学院から東京法学院大学へと改称した際に帝国大学なみに増額されるが、二〇年四月に大学令に準拠した大学となつて以降は東京市域で最も学費の安い大学の一つに数えられるまでになった。また、すでに東京法学院では一八九二年から特待生制度を設け、翌年に

び、卒業、弁護士試験に及第し、のち星法律事務所の全権を与えられ、その後弁護士から代議士となった法制局長官横田千之助を挙げている。

『中央大学校友会誌』第五巻第一号によれば、二五年五月の第三回予科卒業生謝恩会で予科卒業生の白井卯兵が自身の苦学生生活を紹介している。彼は卒業までに新聞屋、車夫、食堂のボーイ、夜学校の事務、外交など多くの職業を経験して現在甘酒屋をしている、予科三年間で収入合計は一、三七三円余、支出合計は一、一八四円余で、一八八円余の貯金があった、苦学生に最も必要なのは貯金であると述べている。

このように苦学生から「成功」をおさめた人々や苦学の実態が紹介される中で、次の成功者を目指して「苦学」を志す多くの人々が東京へ集まるようになる。本学では、二六年に神田錦町から駿河台へ校舎を移転したのち、二九（昭和四）年に予科、三一年に学部それぞれ夜間部を開設するが、このことも「苦学」を志す学生に途を開くことになったであろう。